

創刊の辞

藤 永 太一郎*

財団法人「海洋化学研究所」は昭和20年、故石橋雅義先生が設立され、その初代理事長に就任されました。石橋先生は京都大学理学部化学科分析化学講座を担任しておられましたが、担任の当初(昭和10年)から分析化学研究成果を海洋化学の研究に応用し、純粋化学の立場から海洋に関する真実を探究しようとされました。(本号 別稿 研究論文目録参照)昭和28年新制大学院が発足すると、この壮大な研究構想は公認され、「分析化学及び海洋化学分科」と称せられることになりましたが、昭和20年時点では副研究としてしか認識されていませんでした。

時あたかも敗戦直後の困難な時期でありましたが、兼松株式会社では当時の社長の林荘太郎氏及び昭和21年そのあとを継がれた社長、谷口三樹三郎氏が格別に上記研究構想に共感せられ、会社の学術奨励の精神にもとづき、石橋雅義先生に文部省財団法人「海洋化学研究所」の設立基金を寄贈されたのであります。

爾來、海洋化学研究所は大きな研究成果を挙げ、100篇をこえる論文が刊行されると共に多数の優秀な海洋化学研究者を輩出しました。石橋雅義先生には、海水中微量成分の分析とそれに基づく海洋年齢の決定、によって日本学士院賞が授与され、また度々海洋化学国際会議に招待講演されることになった次第であります。

石橋雅義先生(理事長)は本研究所を京都大学理学部化学科に設置され、われわれ研究室の職員は兼務で本研究所の研究嘱託でありました。分析化学研究室の海洋化学に関する研究はすなわち本研究所の研究である、とのお考えでありましたので、本務の研究所員は一名もなく、予算決算もゼロのまま長年経過してきました。

石橋雅義先生の御逝去に伴ない、京都大学農学部名誉教授 近藤金助先生が理事長を継がれましたが、その後もこの運営方針は堅持されました。一方筆者も京都大学理学部分析化学講座を継承するに当って、分析化学の研究領域こそ恩師石橋雅義先生のそれと多少異なることになりましたが、海洋化学の研究はむしろ先生の兄弟弟子と共にそのまま引継ぐことに致しました。その結果として海洋化学研究所の成果は遅滞することなく発展してきました。白鳳丸による南十字星航海研究によって、北中南太平洋、南氷洋の表層、深海層にわたるクロム3、6価の濃度と溶存状態が明らかにされ、水酸化マグネシウム共沈によるウランの回収分離に成功し、フローカウンターによる海水中の銅、鉛の自動計測、に成功したことなどはその成果の一部であります。なお今回の受賞研究のように、海藻の化学元素濃縮係数、という環境科学の領域において大きな注目を浴びている仕事も亦石橋先生の御研究構想の流れを汲むものと申せましょう。

ついで、近藤金助先生も逝去され、非才の筆者が理事長を継ぐことになりましたが、丁度この時点から四周の情勢が急変して参りました。先ず、文部省からは国立大学への特に経理面における依存性を減らし、研究所自体の活性化をはかるよう、との指示を受けました。

時あたかも、環境問題が数多く提起され、その多くは海洋環境に関するものでありますので、研究所の蓄積した知識と情報は国内はおろか国際的にも極めて貴重なものとなり、また過去の蓄積に止まらず将来にわたっても研究発展が大きく期待されるような情勢となりました。幸いに、紀本電子株式会社、名村造船株式会社、日本ハーモニック・ドライブ株式会社などが上記活性化を願う研究所の請に応じて運営基金を御提供下さることになった次第であります。

本海洋化学研究所はこれら基金を得て一層研究を活潑化し、引続き海洋化学に関する研究情報を収集整理すると共に、これを必要とする学界、業界に提供する仕事を発展させることを希っております。

叙上の方針に鑑み、各種関連学会、講演会、シンポジウムの主催、学術賞などによる斯学振興の努力を致しますが、茲にその一環として研究所報「海洋化学研究」を発刊してその便に供することに致しました。

御関係各位の御教示、御鞭達を切にお願い申上げる次第でございます。

* (財) 海洋化学研究所 理事長